

ロシア文学における生と死(その2) トルストイと

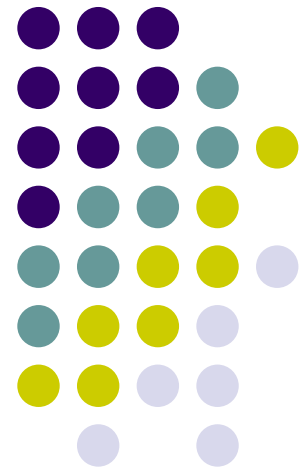
少しチャーホフ

2009年度夏 学術俯瞰講義

第8回 6/8

担当 沼野充義

(文学部現代文芸論/スラヴ文学)



「※:このマークが付してある著作物は、第三者が有する著作物ですので、同著作物の再使用、同著作物の二次的著作物の創作等については、著作権者より直接使用許諾を得る必要があります。」



レフ・ニコラエヴィチ・トルストイ

● Л е в Н и к о л а е в и ч
Т о л с т о й

Lev Nikolaevich Tolstoy (Tolstoi)

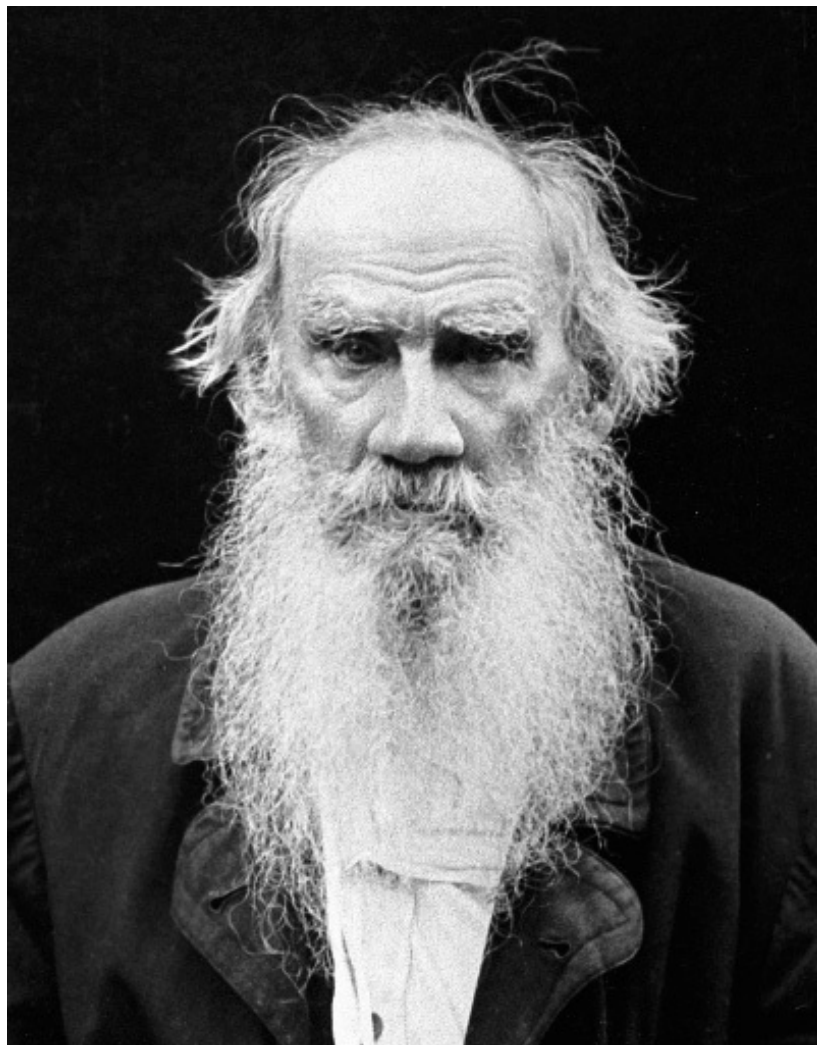
1828.8.28(文政11年)～

● 1910.11.7(明治43年)

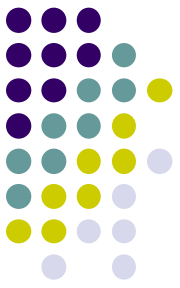
イワン・クラムスコイによる肖像画
(1873年) モスクワ、トレチヤコフ美術館所蔵



トルストイ晩年の写真(1900年代)



ドストエフスキーとトルストイ 世界文学二つの巨峰(1)



しばしば対比されてきた二人の大作家

ドミトリー・メレシコフスキー『トルストイとドストエフスキー』
(1901-02)

ドストエフスキー「霊の預言者」

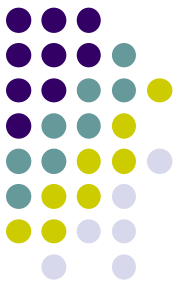
トルストイ「肉の預言者」

ジョージ・スタイナー『トルストイかドストエフスキーか』
(1959)

ドストエフスキー: オイディプスの悲劇の系譜

トルストイ: 叙事詩の系譜

ドストエフスキーとトルストイ 世界文学二つの巨峰(2)



- アイザーク・バーリンの『ハリネズミとキツネ——「戦争と平和」の歴史哲学』(1953)

古代ギリシャの詩人アルキコロスの詩の断片

「狐はたくさんを知っているが、ハリネズミはでかいことを一つだけ知っている」

ドストエフスキーは「ハリネズミ」型

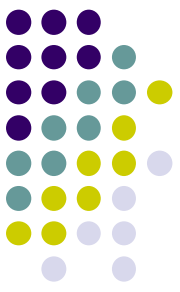
プーシキン「キツネ」型

それではトルストイは？ 本来はキツネだったのに、自分はハリネズミだと信じていた(バーリンの仮説)



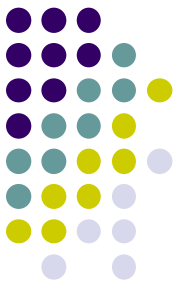
トルストイの生涯(1)

- 1828年 トウーラ県ヤースナヤ・ポリャーナで、トルストイ伯爵家の四男として生まれる。
- 1847年 カザン大学中退、ヤースナヤ・ポリャーナの領地に戻り、農村経営。ペテルブルク陸軍中央工兵学校入学。
- 1852年 砲兵下士官となる。『幼年時代』を発表、新進作家として注目される(「魂の弁証法」)
- 1854年 少尉に昇進後、セバストーポリの戦場へ。



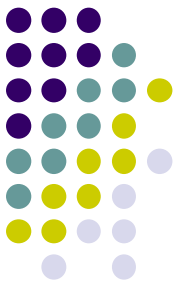
トルストイの生涯(2)

- 1855年 「12月のセバストーポリ」「5月のセバストーポリ」発表
- 1862年 長編『戦争と平和』に着手(～完結1869年)
- 1873年 長編『アンナ・カレーニナ』執筆開始(～完結1878年)
- 1880年代から「宗教的転回」をとげ、宗教的思索を深め、ラディカルなトルストイ主義と呼ばれる思想的立場を築いていき、世俗的な文学を否定する傾向に傾く。



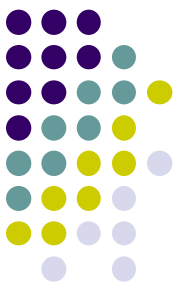
トルストイの生涯(3)

- 1886年「イワン・イリッチの死」
- 1886年 「イワンのばか」
- 1889年「クロイツェル・ソナタ」
- 1891年 1881年以降の著作権を放棄。
- 1897年 迫害されるドゥホボール教徒を支援。
- 1898年 『芸術とは何か』
- 1899年 ドゥホボール教徒救援費用捻出のため長編『復活』刊行。



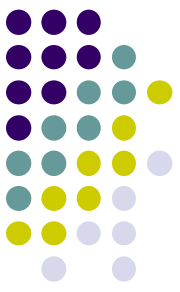
トルストイの生涯(4)

- 1901年 ロシア正教会から破門される。
- 1904年 日露戦争勃発後、戦争批判の激烈な論文「思い直せ」を書き、ロシア皇帝と日本の天皇に送る。
- 1906年 死刑反対の論文「黙ってられない」
- 1910年 家出を敢行、リャザン・ウラル県の寒村アスターポヴォ駅で急性肺炎を起こして逝去。大ニュースとして世界で報道される。



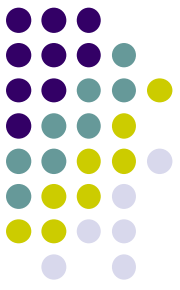
セバストーポリでの死の経験(1)

- 1851年軍務についてトルストイは、カフカスで山岳民族との実戦を経験。
- その後、1852年クリミア戦争の激戦地セバストーポリに自ら志願しておもむき、もっとも危険な第四堡壘に入る。
- この時の経験をもとに書いた短編が「12月のセバストーポリ」「5月のセバストーポリ」。
- 後のトルストイの反戦思想の原点に、戦争体験がある。
- Cf.クリミア戦争で負傷兵の看護に献身的に努力したのが、イギリス人女性フローレンス・ナイティンゲール(後に国際赤十字委員会を設立したアンリ・デュナンは彼女を高く評価していた)



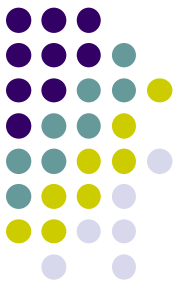
セバストーポリでの死の経験(2)

- 「5月のセバストーポリ」
- 爆弾に直撃されて、死ぬ瞬間の描写
- 「恐怖、他の一切の思想、感情を押しつけてしまうような冷たい恐怖が、彼の全存在をひつつかんだ。彼は両手で顔をおおった。
- また一秒が経過した。一秒ではあるが、その間に、感情・思想・希望・回想の一大世界が、彼の脳裏をひらめき通った」(中村白葉訳)



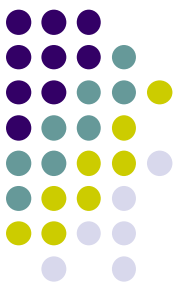
アルザマスでの死の恐怖

- 1869年、ペンザ地方への旅の途中、アルザマスという町の宿で、異常な死の恐怖に突然襲われた。
- 妻への手紙「私には異常な一つの事件が起こったのだった。夜中の2時だった。私は恐ろしく疲れたので、寝たくなかった。と、どこにも具合の悪いところはなかったのに、突然、憂鬱が、恐怖が、驚愕が、私に襲い掛かったのだ(.....)。これに似た苦しい感情はいままで一度も経験したことがないし、誰も味わいたいとは思わないだろう」(→後に未完の小説「狂人日記」にもこのときの経験が書かれる)



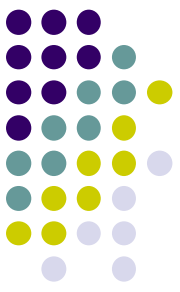
『戦争と平和』を読む(1)

- 小説のあらまし
- タイトル War and Peace / Война и мир
- 1812年のナポレオン戦争(ナポレオン軍によるロシア侵略、ロシアでは「祖国戦争」と呼ばれる)を背景に、戦争を扱った歴史的な部分と、「平和」な生活(主として貴族たちの社交・恋愛・家庭生活)の両方を描く。
- 主要登場人物
- アンドレイ・ボルコンスキー公爵
- ピエール・ベズーホフ公爵
- ロストフ家の令嬢ナターシャ



『戦争と平和』を読む(2)

- 生と死のすべてを呑み込む「モンスター」としての小説
- トルストイ自身の解説「『戦争と平和』は長編小説ではない。叙事詩ではなおさらでない。歴史的記録ではさらでない。『戦争と平和』とはそれが現在表現されているような形式に表現することを著者が望んで、そして表現しえたものである」
- ヘンリー・ジェイムズ トルストイの小説を「ぶよぶよ、ぶくぶくのモンスター」loose baggy monsters と呼ぶ。

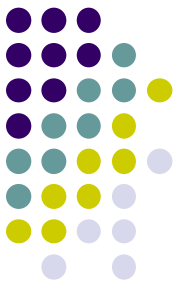


『戦争と平和』を読む(3)

生と死の特権的瞬間——啓示の瞬間

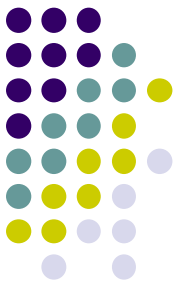
アウステルリッツの戦い(1805年)で瀕死の重傷を負った
アンドレイ・ボルコンスキー公爵が生と死の境で見た「永
遠の空」

「彼の上にはまた、前よりもいっそう高く流れる雲を浮かべ
た、同じ変わりのない高い空があり、その雲を通じて、
青々とした永遠がうかがわれた(.....)。このときには、
ナポレオンも、この高い無限の空と彼の魂との間に生じ
つつあるものに比べては、あまりに小さく、とるにたらぬ
人間のように思われた」16



日本の作家への影響も

- 芥川の「首が落ちた話」(1917)には、日本兵に斬られて瀕死の重傷を負った中国人の主人公が青空を見上げ感慨にふける場面。
- 当時『戦争と平和』を読んでいた芥川への直接的影響



『戦争と平和』を読む(4)

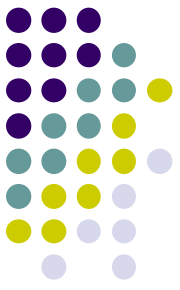
リアリズム小説の究極(「全知の視点」)

ディテール:メトニミー metonymy(換喩)的ディテールの正確さ

より大きな宇宙的リズム

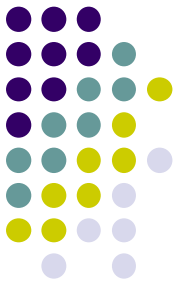
トルストイがここで駆使する手法:

異化(オストラニエーニエ `с т р а н е н и е`
(ロシア・フォルマリズムの文芸理論家ヴィクトル・シクロフスキーの用語))



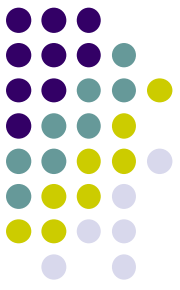
『戦争と平和』を読む(5)

- エピローグでのヒロイン、ナターシャの変貌
- 1813年に結婚、1820年にはすでに3人の娘と一人の息子の母となっている。
- 「その顔にはもはや以前の彼女の魅力であった、たえず燃えているようないきいきした火はなかった。今ではしばしば、顔とからだが見えるだけで、心はぜんぜん見えなかった。見えるのはただ、丈夫で、多産な牝であった(.....)。彼女の発達した美しい肢体に、以前の火が燃え上がるようなときには、彼女は以前よりまたいちだんと、魅力を増して見えるのであった」



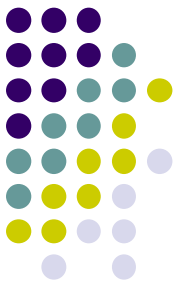
ソ連映画『戦争と平和』
セルゲイ・ボンダルチュク監督、1967年
(ナターシャ役:リュドミラ・サヴェリエヴァ、ピエール役:ボンダルチュク本人)

著作権上の都合により
ここに挿入されていた図表及び動画は
削除致しました



『アンナ・カレーニナ』を読む(1)

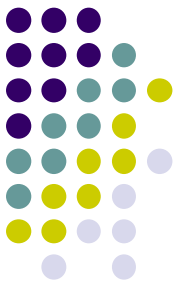
- 小説の概要
- きわめつきの「不倫小説」か？
- まだ若く、生命力にあふれた人妻のアンナ
- その夫、二十歳も年上の政府高官カレーニン
- アンナとの情熱的な不倫の愛に走る近衛騎兵ヴロンスキー
- トルストイ自身の分身的な存在レーヴィン 「何故生きるのか」という問いに悩みながらも、キティとの幸福な結婚生活を送るようになる。



『アンナカレーニナ』を読む(2)

- 「復讐するは我にあり、我これに報いん」というエピグラフの意味
- 出典 旧約聖書申命記(32:35)
- モーセの伝える主の言葉
- わたしが報復し、報いをする
- 彼らの足がよろめく時まで。
- 彼らの災いの日は近い。
- 彼らの終わりは速やかに来る。(新共同訳)

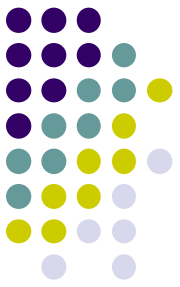
- このエピグラフをどう解釈するか？ トルストイの意図は？



『アンナ・カレーニナ』を読む(3)

小説で前景化する死と生

- ・レーヴィンの兄の死とキティ(レーヴィンの妻)の妊娠
→死と生のサイクル
- ・生の意味をつかみかねて悩みながらも、「神のために」生きる道を探り、結婚生活の幸せを味わうレーヴィン。農民とともに草刈をし、労働から幸福を感じる。
- ・破滅して最後に鉄道自殺に追い込まれるアンナ 罰せられたのか？ 誰に？



『アンナ・カレーニナ』を読む(4)

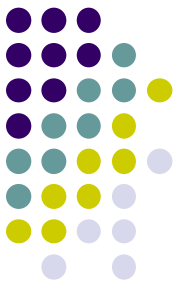
トルストイの根源的な矛盾

自分をハリネズミだと思っていたかったトルストイ？

倫理的な思想のもとに生を一元的に統制する志向と
生の多面的な喜びをよく知っていた旺盛な生命力の同居

- ・ 「肉」と「精神」の対立と統合

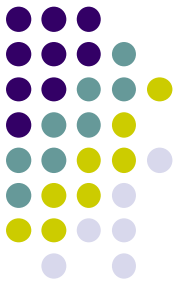
レーヴィン-キティの清純な愛に基づいた家庭生活
アンナとヴロンスキーの肉欲に基づいた、破滅を避けられない愛の妖しさの対比



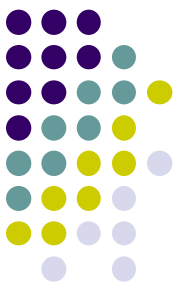
『アンナ・カレーニナ』を読む(5)

- 作者の意図を超えて成長したアンナ？
- 創作の構想の初めでは、アンナはもっと軽薄で醜い存在だった。
- →単に不倫の愛ゆえに罰せられるべき存在
- 夫カレーニンはもっと高潔な人間となるはずだった。
- 最終的に現れたアンナ像は、初期の構想からはだいぶ違う。タイトルに彼女の名前が冠せられた理由。
- 「アンナは故意に目の光を消したが、それはかえって彼女の意思に反して、ほんの微かな微笑のうちに輝いていた」(最初に登場する駅の場面の描写)

ソ連映画『アンナ・カレーニナ』
アレクサンドル・ザルヒ監督(1967年)
アンナ役: タチヤーナ・サモイロヴァ(左)



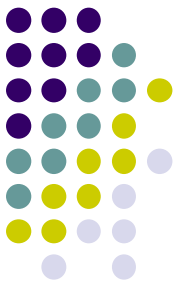
著作権上の都合により
ここに挿入されていた図表及び動画は
削除致しました



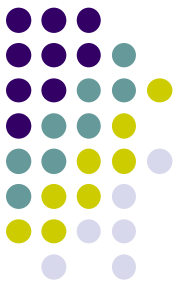
『イワン・イリッチの死』(1886)

- 裁判所判事のイワン・イリッチが突然、45歳でほんのちょっとしたことがきっかけで死んでしまう。
- 彼が死にかけてときの周囲の反応——偽善的、打算的で、本当に自分を愛している人がほとんどいないことがわかる。
- 「自分のいきかたは間違っていたのではないか」と疑念が生じ、死の恐怖に悩まされる。
- しかし、最後には「『死は終わった』彼は自分に言った。『もはや死はない』彼はひとつ息を吸い込み、吐く途中でとまったかと思うと、ぐっと身を伸ばしてそのまま死んだ」

作家の死にざまートルストイの「人騒がせ」な家出と死



- トルストイの家出と死は、世界的な大事件となる。
- 葬儀に集まった大群衆と、規制しようとするロシア官憲。
- 日本でも論争が起こった。
- 正宗白鳥「トルストイが、山の神を恐れ、世を恐れ、おどおどと家を抜け出て、孤往独遇の旅に出て、ついに野垂れ死にした径路を日記で熟読すると、悲愴でもあり滑稽でもあり……」
- それに反論したのが小林秀雄。



アントン・パーヴロヴィチ・チェーホフ

- А н т о н П а в л о в и ч
Ч е х о в
- Anton Pavlovich Chekhov
- 1860年(万延元年)1月17日生まれ
- 1904年(明治37年)7月2日没

チャーホフの肖像 オシプ・ブラズ絵(1898年)



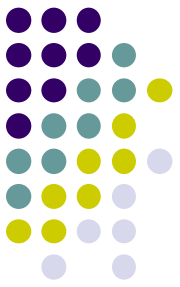


チェーホフの主要作品

- 短編小説の名手として
- 「かわいい女」「犬を連れた奥さん」「中二階のある家」
- 「退屈な話」

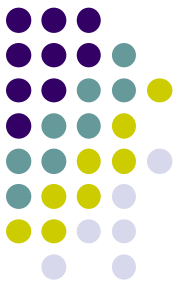
- 今でも上演され続ける現代演劇の古典
- 初期のボードビル
- 後期四大戯曲「かもめ」「ワーニャ伯父さん」「三人姉妹」「桜の園」

Ich sterbe 「イツヒ・シュテルベ」 ——チェーホフが抱え込んでいた死——



- チェーホフは当時不治の病であった結核に冒されていた。彼の創作は自分がやがてこの病気で死ぬというはっきりした自覚のもとに書かれていた。
- チェーホフは1904年7月2日、ドイツの療養地にいたチェーホフは医者を呼び、ドイツ語ではっきりと「Ich sterbe (私は死ぬ)」と言った。もはや治療のすべはないと悟った医者はシャンパンを持って来させる。チェーホフは「僕はながいことシャンパンを飲んでなかったね……」と言ってそのグラスを飲みほすと、静かに永眠した。享年44歳。

戯曲『かもめ』（初演1896年）



- 初演の二年後、1898年、モスクワ芸術座での上演が大成功（演出はスタニスラフスキーとネミロヴィッチ＝ダンチェンコ）
- 主人公トレープレフ（若い作家）はどうして最後に自殺するのか？
- 破滅したように見えるニーナ（女優になることを憧れて挫折した）はどのような「信仰」を持っていき続けられるのか？
- どうして「喜劇」とされているのか？

「かもめ」栗山民也演出(2008年) 藤原竜也主演



画像・動画提供：
株式会社ホリプロ